みぎわパン

日光写真セット

付録の感光紙はセピア色に焼き上がる。自作の感光紙だと青く焼き上がる。どうもくやしい。

茶色なんか
いらんもーん
ドス
ドス
ふん

つかわんクレパスはこうゆうことに
つかうんだよ
ぬり
ぬり

ノウズシャドー
くるっ
(おそれいりました)

茶色ならやるよ、
クレパスって…おっこちたら二度と出られんのでしょー
もってきたー

ガキツゥー
タデタデー
ガキツータディー
あ、イヨイヨ

ミカちゃんにクレヨンもらった
ミカちゃん?土屋さんのかね?
ザァー

あのこはべっぴんさんになるよ～
ミカちゃんは中尾ミエに似てるってご近所でもひょうばんです
あとね、
バアムクーヘンももらった、
ダダッ
ババアも喰えへん？
ダダーーッ
あんな娘が
くるっ
欲しいねえ…
ボチャッ
学校のプールでできる整形手術、
―チャート式―
ASTONIC
SHISEIDO
REAM

分類
ノウズシャドーがはいってほりの深い顔になる
1時間後
日やけ止めをぬる部分
サンオイルをぬる部分
ハイライト
かげ状に日やけする
じーっ
ぬり
ぬり
ベかあーっ
ひやっ
ドオオーン
こまき空港の近くだからね、
はやくはやく、
はやくはやく、
カランコロンカランコロン
ペタシペタシ
二子山古墳にひこうきが墜ちました
どーしたへーきかった、
ザワ
ザワ
ザワ
プロパンかっ?!
ナンデスノ?

二子山古墳
夜空に浮かび上がる
めいてつこまき線
ゴォ・・
ゴォ・・
ゴォ・・
ひこうきのざんがい
よーもえてござるわ
じしんみたいだったねえ
お〜が…
く
ああ．
もっ
もんさかさんっ！

おそがいもんで
みんな、
気が弱くなって
しっかりーッ
産気づいたかっ!?
くちぐちに
夜のあいさつを
かわしてから
帰りました
ねずみに
ひかれない
ように
ね
ねずみに
ひかれないね
ように
ねずみにひかれないようにね
※さみしい夜の合いことば
ジノ
じゃ、わしらここで
うん
ジノ
ぱんこちゃん歯ア
みがきいよ
ジノ
ジノ
かなしばりにあったまま
えんがわまで引かれてゆく
ズッ
おかあさんやめて…
ズッ
ズッ
ハタ
ハタ
わらびもちは
皆さんでめし上
がって下さい
こっちは
りっちゃんの
お洋服です
よろしる

ミーン
ミン
ミン
ミー
もんさかさんの おなかにいた子も 2さいになりました
皆さんで、
めし上がって下さい こっちはりっちゃんのお洋ふくです わらびもちは みなさん
上がって下さい こっちは りっちゃんの
お中元
てく てく
ミーン ミーン
わらびも ちは…（略）
おようふ くです
りっちゃん
おひるねしてるのよ
ばぁー
おなかに子がおるとき 手で顔おおった もんだでだわ
ぽいりっちゃんも おひるねしてレ～っ。
火い見ながら
顔おおったら いかんのだわ
へ
えんどうの スジ取り
あっあ．
ヌ
ん
おそが…

そう
思って
見れば見るほど
ほら
手の跡そっくり
そや
キャッ
キャッ
てんっ
てん
パ
パ
オーシ
オーシ
ツク
ツク
カン
カン
お、
ウ〜
ウ〜
ダーッ
カン
カン
ガー
いそいで
かけつけ
ダーッ

下がって
キケンです
さがってください

最前線で
ギュウゥー

じじ
蜂
じいじい

これをやる習わしに
なりました
あ、こども、
ここんとこに影ください
ここんとこにノウズシャドー……
さがってさがって
ギラ
ギラ
ゴォオオオオ

おしまい

Z TEXT

ZERO

For Children

Z.P.F

これはＺちゃんの物語りを
読むためのテキストです

ROSE HEAVEN

「ねえ、約束の街の話しをしてあげましょうか」
「話したい？」
「聞きたい？」
「じゃあ聞きたい」
「約束の街はね
約束の道があって
約束の花壇があって
約束の噴水が
約束の虹を作っているわ」
「なんだか約束だらけだね」
「それから、約束の人々がいて、
もちろん、約束の床屋があるの」

Zちゃんは「最後の花」という長い長い物語りの26番目の主人公の世界の話しである。

「最後の花」は、かたつむりの城のてっぺんの部屋にあるという、夢を叶えることができる花を求めて旅と冒険を続ける物語だ。

かたつむりの城はとてつもなく大きく、主人公はアルファベット順に世代交替を繰り返しながら登ってゆく。

最後の花

物語りは暗闇の中の「じゃあ行くよ」という主人公の声とともに始まった。
カタツムリの城の中は意外に大きく、主人公が途中で恋をし、その相手との間に何人もの子供をもうける程の時間を費やしても、お城のてっぺんにある『最後の花』を手に入れることはできなかった。やがて彼は年をとり、自分の望みを子供達に託して死んだ。子供達は父親の意志を継ぎ、お城を登り続けた。子供達の中で最も勇気があり、困難を克服して『最後の花』を手に入れそうな者が2番目の主人公に選ばれた。しかし、カタツムリのお城は予想をはるかに超えて大きく、そのうちに山や川までも現れ、いつまでたっても『最後の花』を見つけることができないまま年をとっていった。2番目の主人公は1番目の主人公である父親と同じように、自分の意志を子供達に託した。
3番目の主人公の代になっても、お城の中はきりがなかった。それどころか、ますます頂点は遠ざかっていくような気持ちさえした。
誰もかれもが死にものぐるいで先へ先へと行きたがった。あらゆる困難を克服し、ちょっとした恋をし、ばかばかしいほど巨大になってしまったカタツムリのお城の中を、登っていった。何人かの主人公は、あきれるような悲惨さの中でそれ以上先へ進むことに疑問を持ったが、おかしなことにそんな連中に限って、早道を見つけるのがうまかった。
後半になるほど、最初の主人公の意志はぼんやりとし、誤解され、複雑にもなった。しかし、希望をかなえたいという点や上に登りたいという点において全ての主人公は共通していたので、物語は大きくテーマをはずれることもなかった。

LOTUS HEAVEN

Zは床の上で目を覚ます
Zははじめから、「とんがり帽子」を被っていた
Zははじめからからっぽだった
Zは丘の上の小さな家に住んでいる
小さな家はZゾーンのなかにある
Zゾーンはロータスヘブンの中にある
ロータスヘブンは絶望と希望の向こう側にある

13番目の主人公Mは、それまでの主人公の誰よりも『最後の花』に近そうに見えた。彼は想像可能な限りの美しさと、強さと、賢さと、それからお金を持っていた。

彼の家族は日曜ごとに、庭でランチを食べた。彼も彼の妻も、娘も、生まれたばかりの息子も、信じられる限りの美しさでそこにいた。

食卓のまわりは辺りよりもずっと明るく輝き食器やテーブルは恥ずかしがって小刻みに震え続けた。話し声は、たちまち賛美歌となって天に上りつめる。

冬になっても庭には緑が絶えず、花は喜びを隠しきれずに咲きみだれた。

町の人々は美しいランチ風景を見物しようとぞろぞろ集まってくる。

年頃の娘達のため息は、熱をもったまま丘をギャロップで駆け上がる。

希望を失いかけた郵便配達夫の大粒の涙。

誰もがMが『最後の花』を手に入れることを信じて疑わなかった。

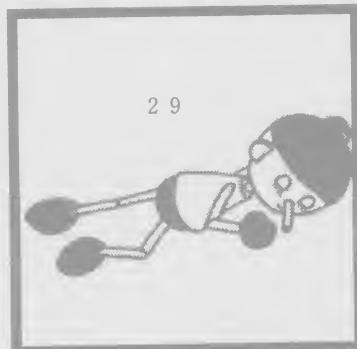
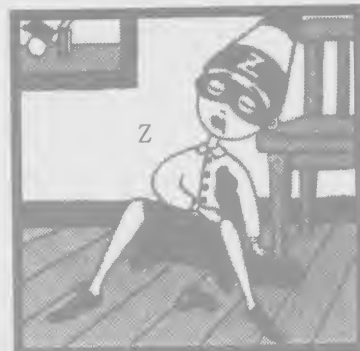
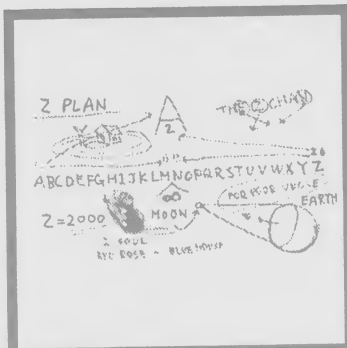
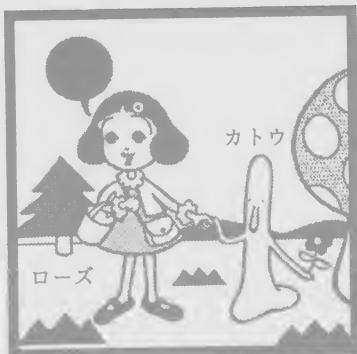
ところがMは『最後の花』を手に入れることなくあっけなく死んでしまう。

彼にはN（ナンシー）という6歳になる息子がいた。物語の主人公はMから彼の幼い息子であるN（ナンシー）に移ったのだ。やがてNは母親も、お姉さんも、幸福な思い出も失ってゆく。かわいそうなNは、何も出来ない子供のままやがて絶望し床に倒れてゆく。

物語はこれで終わったのだろうか。『最後の花』を手に入れること無く、物語は絶望してしまったのだろうか。

物語は終わらなかった。14番目の主人公Nが絶望して横に倒れたとたんに26番目の主人公になるはずだったZが生まれた。N→Z。

夢を叶えようとして、カタツムリのお城に入った主人公の子孫は、今や何十億人にも達していた。それでもカツムリのお城は、そこがお城であることなど、誰も気ずかぬ程巨大なものになっていた。

気が遠くなるような苦労を重ねても、手に入れようとした『最後の花』によって叶えようとしている夢とは、一体どんな夢なのだろうか。

Z「リチャード・セックス、僕の頭に何が見える？」
R「トンガリ帽子さ」
Z「ちょっと子供っぽすぎやしないかな」
R「いやならぬげばいいんだよ」
Z「リチャード・セックス？」
R「なんだい」
Z「僕達は本当の親友かなあ」
R「まちがいないよ、僕のおじさんも言ってたさ」

Zの世界は絶望から始まる。Zには親もなく、思い出もない。

はじめからとんがり帽子とマスクを着けた、からっぽの子供だ。

自分が誰であるのかも、生まれた目的も知らない。彼は自己のアイデンティティーをとんがることで得ようとする。

Zが一人で暮らせるようになるまで、やさしいジュディーが支えてくれた。彼女は本当に素晴しい。

孤独なZの親友となった青ネズミのリチャード・セックス。

1984年に日本に上陸したマッキントッシュのマウス、あるいは心理学の迷路学習実験用のネズミ、あるいは精子、DNAの二重螺旋の片側、天使、認識などを重ね合わせると、なんだかディープな存在に思えてくるから不思議だ。

ローズは現実的な女の子。Zがモダニズムに押し上げられた形而上的至高世界を求めるとすれば、ローズはポストモダニズムでくるまれた世俗的幸福を望む。緊張したZの世界に、かわいさやくだらなさが広がってゆく。

カトウは何だ？彼は森に住む精霊かタオイスト。それともただのもうろくじじい、頭のゆるすぎる子供、宇宙人？案外普通の人なのかもね。ただ、悪い人にだけは、どうしたって見えない。

29がまさか肉(肉体)であり福(お金)の象徴だなんて、あきれてものが言えない。

それから、きれいな古川さん。彼女はZの世界につい

●小人達、そして大国の果

窓から外をながめるのが好きだ
窓からは庭のY字型の木と遠くの
山が見える
他には空が
窓から外をながめていると
夕暮れにムク犬の背中をいつまで
もなで続ける孤独なエスキモーの気
持ちがわかるような気がしてくる

て、誰よりも良く知っている。古川さんは歌をうたい、やさしく子供達を見守る花の女王。ある日彼女は、ローズに世界の秘密を話した。Zの住むロータスヘヴンはローズヘヴン（現実）に住むローズが眠っている時に見る夢の世界であることを。そして、ロータスヘヴンの連中は夢の中にしか住めないことを。

カエル達もいた。彼らはローズヘヴンのバラの谷からやって来た連中だ。だんだん数も増えてきた。

遠くの方にはいつも同じ景色が見える。モミの木、二つの峰を持つ山、そしてその間にあるのは道なのか、川なのか。それは何処から何処へ続いているのか。

丘の上の犬小屋のような家、Y字型の木、イヴ・クラインの作品のような庭。裏庭には白いグラジオラスの花がたくさん咲いている。風が吹くと、甘い思いでのようにゆっくりと揺れる。

空に見える小さな黒い楕円形、ネズミの穴、リンゴ、キノコ、ダイアモンド、水、Zパウダー、ローズキャンディー、そしてバラの花。その他にもいろんなものが意味ありげにもったいぶって登場する。謎はいたずらに深まるばかり。

時々文字だけで表現される『見えない世界』。見えない世界は『最後の花』という物語が始まって以来、ずっと平行して存在した。見えない世界の小人達が汗と埃にまみれて働くおかげで物語は進行してゆけるのだ。Nの世界では疲れ果てボロボロになった小人達だったが、Zの世界では途中から壁を壊す作業にとりかかった。やがてロータスヘヴンとローズヘヴン、精神と物質、形而上と形而下、有と無、善と悪、大人と子供、生と死、美と醜、男と女、未来と過去、等あらゆる相対的なものが、その境界を徐々に失う。

VOICE OF SHINGO IGUCHI

運

広島時代は思い悩んでばかりいました。大学を卒業した後も、社会的な目的も見つけられなくてフラフラしてました。そんな時、たまたま手相を観てもらったことがあるんです。すると「三十迄は定職もないが、それを過ぎれば大成功する」と言うんですよ。笑われるかも知れませんが、占い師が無責任に言ったに違いないその言葉に、僕は結構引きずられたんです。もう三十越えたんですけどね。

東京に来てからは、目がまわる程の偶然ばかりが起こりました。

何も出来ない自分ですが、運と、ペテンと、過剰な自信だけはあるように思えるんです。

薔薇

バラには助けられたことがあります。本当に苦しかった頃、全てを失っていた僕を支えてくれたのは、彼女だったのです。

絶望

かつて、目覚めるとすぐ絶望してまた寝込む毎日でした。

本が出るまでの8年間の自分の人生は、実際に迷路学習している様なものでした。

でも、やっと自分自身に辿り着けたような気がします。

夢

1984年に設立した『チューリップウォーター・インターナショナル』は希望者に毎年チューリップの球根を送り続けています。将来は『チューリップウォーター・ミュージアム』という公園を造り、そこから世界中に球根を発送したいと夢見ています。公園には美術館や、花時計や、噴水があります。地下には核シェルターがあって、それは映画館にもなっているのです。そしてその公園は金持ちも貧乏人も、老人も子供も、男も女も、猿も小鳥も和めるものにしたいと思っています。

お金

お金って人間が発明した物質エネルギーの象徴だと思うんです。人間の発明で最大級のエネルギーを持っていると言っていいと思います。いまやそれは、社会に、大きすぎて形が分からないほど巨大な壁をつくって、逆に人間は閉じ込められているわけです。その壁にどうやって穴を開けるか。このお金のエネルギーを越える方法を考えれば、それはやはり愛しかないのでしょうね。

宇宙

誇大妄想かも知れませんが、宇宙は僕にとって身近な問題です。昔、愛の対象は太陽だったと思うんです。つまり一つの対象を全員が愛していた。それが何時しか星（スター）に変っていった。美しいものが一つでは足りなくなったのです。それでもまだ愛の対象は彼方に輝いていたのですが、今や全ての人が、自身の内に宇宙を持っているのではないかという考えが現れてきました。神は自身の内側にこそ存在すると。それは利己的にというのではなく、全ての人々が同等に神を持つことによる超肯定的な世界の訪れを示唆しているのだと思います。決して言い切ることなどではありませんが、もしかするともう人間は神を目指す必要がないのでは、何かに進化し続けなくとも生きてゆけるのかもしれません。もう願望・欲望から解放されていい、僕は僕になりたくて生まれてきたのだからと思える時代が、もう間近まで迫ってきたかなと感じるんです。精神と物質の共存、自己と宇宙の一体化が遂に実現する？『最後の花』はそろそろ私たちの目の前に現れるのかもしれませんね。

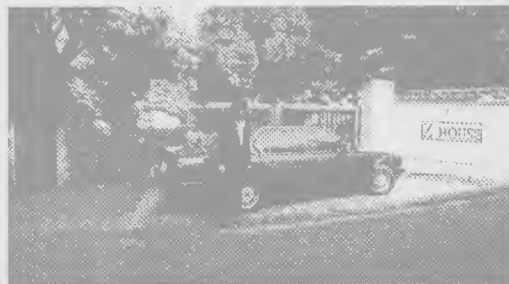



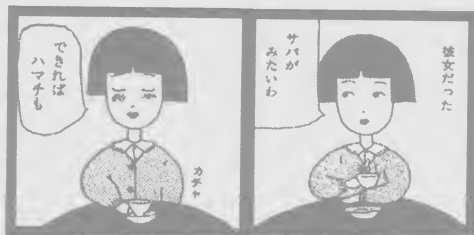
Photo Jun Yamanaka　文責　編集部

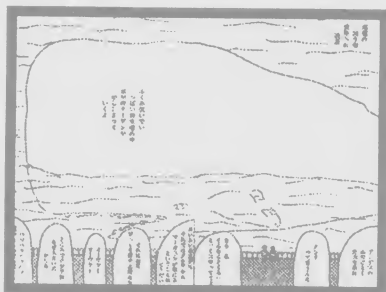
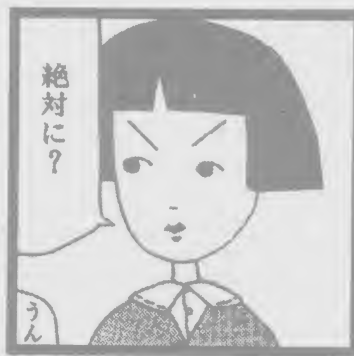
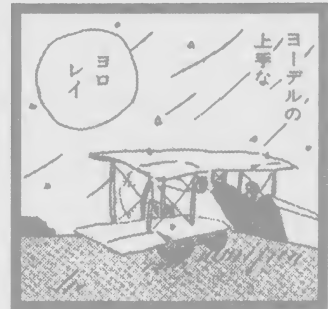
Z CHAN

デビュー作(1983年ガロ6月号)

ステキな水族館

井口真吾

水族館に行こうと言い出したのは彼女だった

「サバがみたいわ」
「できればハマチも」
「サバはほんとにいるかしら」
「夢の数ほどいるともさ」
「良かったわ
絶対に？」
「うん」
「アナタが好きよ」

海藻の向う側
彼岸への近道
「アンデス山のごとく巨大な魚ね」
「クジラって言うんだ」
「あら 私そんなことくらい
とっくにしっててよ」
ふくみ笑いでいっぱいの水槽の中
水中のターザンがかしこまっていくよ

「おいおい鼻息だな、それではクジラからマーガリンが取れるということはどうだい」
「それは初耳
びっくり仰天之助だわ」
「オーヴァー、
オーヴァー」
「ところでクジラはなぜ大きいのかしら」

「ハッハッ
ハッハッ
困ったもの
だね君にも」
「ねえ」
「ガム食べる？」
「いらないよ」
「まあ」
「おいしいのに」
彼女は「四季の歌」を最後までうたえる
「じゃあ
香水つける？」
「あとでね」
「そう」
「外国製よ」
「本当よ」
ランカシャーのおじさんが

ヨーデルの上手な
ランカシャーの
ヨーデルのとても上手なおじさんが
心を込めて送ってくれたわ
水族館は

「あ
美しい香なのに
外国製なのに」
ペチャ・コロリン
「ころばぬ先の杖」
水族館は

「痛くなんかない
のよ、これっ
ぽっちも同情は
いらないわ」
「本当は強い人な
んだね
君って人物は」
「スイッスランド
の花のごとく
やさしいのね」
「おいおい人が見
てるよ」
水族館は
「ちょっとだけつ
けてみる？」
「あとでね」
水族館は

「まぁ！
天使の口づけのような
香りだわっ」
水族館は